

カルダーノ研究の最前線 本書の解説にかえて

坂本邦暢

「これだけはいえると思う。どんな仕方にしろ、私の名はある期間は残るだろう。」ジローラモ・カルダーノは自叙伝『わが人生の書』のなかでこう述べた。しかし予言能力に恵まれた彼とてよもや日本の地で、しかも四〇〇年以上のときを経て、自分の名が人びとの口の端にのぼることまでは予期していなかっただろう。それほどまでに日本の読者はカルダーノに親しむ機会に恵まれてきた。O・オア『カルダーノの生涯・悪徳数学者の栄光と悲惨』（東京図書、一九七八年）にはじまり、一九八〇年には自叙伝の翻訳が二種類出版されている。二〇〇七年には A・グラフトンの『カルダーノのコスモス・ルネサンスの占星術師』（勁草書房）が翻訳された。また同年に出された『哲学の歴史』シリーズ第四巻「ルネサンス（一五・一六世紀）世界と人間の再発見」（中央公論新社）には、カルダーノをあつかう章がもうけられている。このうちオアの研究書をのぞくすべてにたずさわってきたのが、本書の著者である榎本恵美子さんである。本邦においてルネサンス

（1） カルダーノ『わが人生の書』青木靖三・榎本恵美子訳（社会思想社、一九八〇年・現代教養文庫、一九八九年）、第九章、四一頁。

思想史上カルダーノに特筆すべき地位が与えられているならば、その功績はひとえに榎本さんに帰されるべきである。⁽²⁾

一般読者向けの活動と並行して、榎本さんはカルダーノ研究の成果を数多くの専門的な論文として公刊してきた。本書はそれらを大幅に増補・改訂して一書にまとめたものである。それぞれの論考を読んでまず驚かされるのは、アプローチの斬新さだ。榎本さんの着眼点は同時期に行われていた研究のそれとは一線を画している。カルダーノ研究では、彼の思想がいかに一七世紀の新哲学を予期していたかが着目されてきた。

一七世紀にデカルトらによつてスコラ学的アリストテレス主義が崩壊させられることを前提に、その前史としてカルダーノの自然観が検討されたのである。

このような「未来からさかのぼる」というアプローチを榎本さんはとらなかった。探求の出発点は一七世紀ではなく、カルダーノの自伝である。問われるのは、カルダーノの先にいかにデカルトがあるかではなく、『わが人生の書』という不可思議な書物がどうして成立しえたかだ。答えは、占星術師であり医師であり夢解釈者であり守護霊にまもられた人物であったカルダーノ自身のうちに求められた。そうして導きだされた自叙伝の解釈は、真に独創的なものである。『わが人生の書』の前半部はプトレマイオスの占星術書『テトラビブロス』の枠組みを援用したものであった(本書第三章を参照)。後半部はガレノスの『自著について』が叙述の基盤となっている(本書第四章)。ガレノスという強烈な個性を有した医学者をモデルとすることで、カルダーノもまた自分の特異性、あるいはこういつてよければ、天才を証明しようとしていた。しかし天才の代償は高くついた。同僚には妬まれ、教会からは異端の嫌疑をかけられた。あろうことか息子は処刑され

た。だが過酷な運命の慰めになったのもまた彼の特異性であった。夢を解釈することができ、守護霊からの助言を受けることができたからこそ、試練に意味を見いだせたのである（本書第五章と第六章）。この特殊な能力は何に由来するのだろうか？ それは占星術、つまりブトレマイオスの領域から説明されるべきと、ここに自伝の構造は輪を描く。星辰に運命づけられた天才の肖像として『わが人生の書』は読めるのだ。

多岐にわたるカルダーノの活動を統合して、一つの知的世界を描き出すことが榎本さんの目指したところであった。近年のカルダーノ研究を見ると、あたかも榎本さんが示した方向にむかって多くの研究が深められているかのようなのである。そこでこの場を借りてその概要を紹介することで、本書とこれからの研究とを橋渡しすることにしたい。⁽³⁾

一九九九年から二〇一二年にかけて、カルダーノを主題とする三つの国際論集が刊行された。そのうちの二つ『ジローラモ・カルダーノ…著作、ソース、生涯』（一九九九年）、『カルダーノと知の伝統』（二〇〇三年）はイタリアで行われた会議の成果であり、残る一つはフランスで出版された『カルダーノの科学思想』（二〇一二年）である。またルネサンス哲学史の専門誌『ブルニアーナ&カンパネリアーナ』も、二〇一一年に「自叙伝、自然哲学、夢・ジローラモ・カルダーノ研究」と題された特集を組んでいる。⁽⁴⁾これらの論集や

(2) C・B・シュミット、B・P・コーペンハイヴァー『ルネサンス哲学』榎本武文訳（平凡社、二〇〇三年）、三二一―三二八頁にもカルダーノ自然哲学についての記述があるものの、信頼のおけるものではない。

(3) 一九九五年までの研究はIngo Schütze, "Bibliografia degli studi su Girolamo Cardano dal 1850 al 1995," *Bruniana & Campanelliana* 4 (1998), 449-467. この文獻リストにまとめられている。

特集では数多くの研究者がカルダーノの多面的な活動に光をあてており、そのなかには占星術、夢解釈、守護霊、自叙伝といった榎本さんがとくに深い考察をめぐらせたトピックがふくまれている。榎本さんの調査が及ばなかった領域にもたらされた新しい知見としては、教皇庁に収められていたカルダーノの異端審問に關係する史料の調査がある。U・バルディーニの論文に關連文書が収録されたことにより、本書でとりあげられている占星術や星辰による決定論、夢解釈、父ファツィオの守護霊といった主題がカトリック教会から問題視されていたことが裏付けられた。⁽⁵⁾

史料調査にもとづく基礎研究という点では、I・マクリーンによる書誌学的な研究が著述家としてのカルダーノの活動の全貌を明らかにしており、特筆すべき業績である。⁽⁶⁾『自著について』の校訂版(二〇〇四年)に付された解説では、カルダーノの諸著作が時系列で列挙されている。リストには各著作がいつごろ書かれたのか、出版されたのはいつか、もし出版にいたらず廃棄されたならばそれはいつごろと推測されるのか、最終的に全集のどの部分に収録されたのかといった情報がふくまれている。このリストは今後のあらゆるカルダーノ研究の出発点となるはずである。またマクリーンは論文「ジローラモ・カルダーノ…博学者の晩年」(二〇〇七年)のなかで、カルダーノが自分の死亡日時についての予言を成就するために断食し死亡したという逸話の信憑性を疑い、実際には一五七六年一〇月一日から七七年一〇月二五日までのどこかで死亡したのではないかと推測している。⁽⁷⁾

マクリーンの研究に典型的にあらわれているように、カルダーノの著作の校訂が近年飛躍的に進んでいる。⁽⁸⁾従来の研究は、一六六三年にリヨンで出版された全集版に依拠して行われていた。しかしこの全集は多くの

問題を抱えている。図書館に草稿が残されているにもかかわらず未収録の作品があったり、偽作がふくまれていたりする。ピリオドやカンマの打ち方も不完全である。そこで信頼できる本文の整備が要請されていた。一九九九年から現在までに出されている著作の校訂と現代語訳は以下の通りである。カルダーノよろしく論述のなかにリストを挿入することを許されたい――

- (4) Marialuise Baldi & Guido Canziani (eds.), *Girolamo Cardano: le opere, le fonti, la vita* (Milano: FrancoAngeli, 1999); idem (eds.), *Cardano e la tradizione dei saperi* (Milano: FrancoAngeli, 2003); "Autobiografia, filosofia naturale, sogni: studi su Girolamo Cardano," *Bruniana & Campanelliana* 16 (2010), 404-525; Jean-Yves Borriand (ed.), *La pensée scientifique de Cardan* (Paris: Les Belles Lettres, 2012).
- (5) Ugo Baldini, "L'edizione dei documenti relativi a Cardano negli archivi del Sant'Ufficio e dell'Indice: risultati e problemi," in *Cardano e la tradizione*, 457-515. カトリック教会による自然哲学に対する取り調べ記録の網羅的な調査による Ugo Baldini & Leen Spruit, *Catholic Church and Modern Science: Documents from the Archives of the Roman Congregations of the Holy Office and the Index*, vol. 1 (Roma: Libreria editrice vaticana, 2009) 44-49。
- (6) Girolamo Cardano, *De libris propriis: The Editions of 1544, 1550, 1557, 1562, with Supplementary Materials*, ed. Ian Maclean (Milano: FrancoAngeli, 2004).
- (7) Ian Maclean, "Girolamo Cardano: The Last Years of a Polymath," *Renaissance Studies* 21 (2007), 587-607.
- (8) 校訂事業全般については Enrico I. Rambaldi, "Breve storia delle edizioni cardamane del Consiglio Nazionale Delle Ricerche," *Rivista di storia della filosofia* 65 (2010), 745-773 を参照。

『仲介者もしくは市民的賢明なことば』 *Proxenetæ, seu De prudentia civium liber*

Il proxenetæ, ovvero Della prudenza politica, ed. Piero Cigada (Milano: BertiLusconi, 2001). ラテン語校訂版とイタリア語訳。A・グラフトンによる解説付き。

『わが人生の書』

The Book of My Life, tr. Jean Stoner (New York: New York Review Books, 2002). 英語訳。A・グラフトンによる解説付き。

『自著のことば』

De libris propriis: The Editions of 1544, 1550, 1557, 1562, with Supplementary Materials, ed. Ian Maclean (Milano: FrancoAngeli, 2004). ラテン語校訂版。

『精妙なことば』

De subtilitate, ed. Elio Nenci (Milano: FrancoAngeli, 2004). 第一巻から第七巻までのラテン語校訂版。

Mallis Paire, *Édition traduite et commentée des quatre premiers livres du De subtilitate de Jérôme Cardan*, thèse de doctorat (Université de Lyon III, 2004). 第一巻から第四巻までの仏訳と解説をふくめた博士論文。

『占星術礼讃』 *Encomium astrologiae* や 『出生判断』 *De iudicis geniturarum*

Come si interpretano gli oroscopi, tr. Ornella Pompeo Faracovi & Teresa Delia (Pisa: Istituti editoriali e poligrafici internazionali, 2005). イタリム語訳。

『靈魂の不死性にいつつ』

De immortalitate animorum, ed. José Manuel Garcia Valverde (Milano: FrancoAngeli, 2006). フランソ語校訂版。

『サインコロ遊びにいつつ』

Liber de ludo aleae, ed. Massimo Tamborini (Milano: FrancoAngeli, 2006). フランソ語校訂版。

『シユネシオス派の夢の書』

Somniorum Synesiorum libri quatuor: Les quatre livres des songes de Synesios, ed. Jean-Yves Boriaud, 2 vols. (Firenze: Olschki, 2008). フランソ語校訂版と仏語訳。

『知恵にいつつ』

De sapientia libri quinque, ed. Marco Bracali (Firenze: Olschki, 2008). フランソ語校訂版。

『ネロ礼讃』

Elogio Nerone, tr. Marco Di Branco (Roma: Salerno, 2008). イタリア語訳。

『一にひとつ』

De uno: Sobre lo uno, ed. José Manuel García Valverde (Firenze: Olschki, 2009). ラテン語校訂とスペイン語訳。

『大いなる術もしくは代数学の諸則』

Artis magnaе sive de regulis algebraicis liber unus, ed. Massimo Tamborini (Milano: Franco Angeli, 2011). ラテン語校訂版。

『グリエルムス、あるいは死についての対話』

Guglielmo: Dialogo sulla morte, ed. José Manuel García Valverde & Paolo F. Raimondi (Torino: Aragno, 2011). ラテン語校訂版とイタリア語訳。

『逆境から得られる有用さについて』の第二版

De utilitate ex adversis capienda. Secunda editio, ed. Marialuisa Baldi & Guido Canziani. <http://www.cardano.unimil.it/tesi/utilitate/deutitsec-con-intro.pdf> バーゼル大学の公文書館所蔵の手稿のPDFによ

る復刻。

これらのテキスト整備事業のうちもつとも重要なのが、主著『精妙さについて』のE・ネンチによる校訂版である(二〇〇四年)。一五五〇年の初版と一五五四年の第二版の異同が分かるように組まれた本文に、詳細な注釈が付されている。現在は第一巻から第七巻までを収録した前半部のみが刊行されており、後半部の出版も予定されている。また第一巻から第四巻までのフランス語訳が、二〇〇四年にリヨン第三大学に提出された博士論文でなされている⁽⁹⁾。

基礎的な史料の整備だけでなく、カルダーノの哲学思想の分析も進展をみせた。まず参照されるべきはI・シェッツェの著作『ジローラモ・カルダーノの『精妙さについて』における自然哲学』(二〇〇〇年)であり、『精妙さについて』の前半部で論じられる自然哲学の基礎理論を詳細に分析している。分析成果を歴史的意義づけることに成功しているとはいいたいものの、『精妙さについて』への、ひいてはカルダーノの自然哲学へのよき導入となるはずである。H・ヒライの『ルネサンスの物質理論における種子の概念』マルシリオ・フィチーノからピエール・ガッサンディまで』(二〇〇五年)の第六章は、『精妙さについて』第五巻から第七巻までの鉱物論の検証にあてられている⁽¹⁰⁾。

医学者としてのカルダーノに焦点を合わせた研究も生まれている。アメリカの医学史家N・シライシは

(9) 以上の作品のほかに、BaldiとCanziani編の前掲(二)の論集にもいくつかの小品の校訂版が収められている。

(10) Ingo Schütze, *Die Naturphilosophie in Girolamo Cardanos De subtilitate* (München: Fink, 2000).

『ルネサンス学芸における歴史、医学、伝統』（二〇〇七年）のなかで、一四五〇年から一六五〇年のあいだの歴史学と医学の関係性を検証した。ここではカルダーノによるヒポクラテス文書の利用および歴史を教訓譚とみなすことへの批判が扱われる。⁽¹²⁾ 本書第四章とあわせて読まれるべき著作である。カルダーノによるヒポクラテス文書の解釈をより思想的な観点から分析したのが、H・ヒライの新著『医学人文主義と自然哲学』（二〇一一年）である。カルダーノの物質理論の源泉が、ヒポクラテス文書の『肉質について』と『食餌法について』にあることが論じられる。⁽¹³⁾ 続編にあたる論考では、カルダーノの理論がヒポクラテスを媒介にしてテレジオに受け継がれたことが示される。従来「ルネサンス自然主義者」として漠然とくくられていた哲学者たちの思想に共通の土台を見いだそうとする成果であり、今後のさらなる深化が期待される。⁽¹⁴⁾

自然哲学の各論のなかでも靈魂論の研究は集中的に進められている。本書第一章と第七章で論じられているように、「秩序づけられたさまざまな諸部分を有するものは、すべて靈魂と生命を有する」とカルダーノは考えていた。⁽¹⁵⁾ 秩序の源泉である靈魂とは何なのか？ J・M・ガルシア・ヴァルヴェルデの研究からは、カルダーノが『靈魂の不死性について』（二五四五年）のなかで、靈魂の輪廻転生説をアリストテレスに帰していたことが分かる。⁽¹⁶⁾ カルダーノいわく、「有限の数の靈魂が身体に帰還するということをアリストテレスが認めていたことは疑えない」。⁽¹⁷⁾ この見解をある程度カルダーノ本人も支持していたことは、彼の世界観全体からみて間違いない。問題はその程度であり、またその後の著作において見解の変化があったか否かである。カルダーノが靈魂論を練りあげるにあたり何を参照していたのかもより正確に確定されなくてはならない。

一なる原理である靈魂が多として現れることで世界に秩序がもたらされる。この観念がカルダーノ思想の中核をなしているということは、近年の研究でますますあきらかになりつつある。この考え方は著作『一について』でもっとも明確に打ちだされているが、本書第Ⅲ部の主題はこの書物であった。ここでも榎本さんの先駆性が光る。本書第七章のもとになった論考が発表された一九八五年の時点で、『一について』を主題としてとり扱った研究はなかった。一九九五年の日本語訳につづく現代語訳であるスペイン語訳が刊行されたのは、ようやく二〇〇九年になってからであった。

しかしその先駆性ゆえに、第Ⅲ部は歴史研究としては萌芽的な段階にとどまっている。とくに『一について』で示されている世界観を「時代精神の一般的な傾向」に帰す記述は、具体性をそなえた記述におきかえ

- (11) Hiro Hirai, *Le concept de semence dans les théories de la matière à la Renaissance: de Marseille Ficin à Pierre Gassendi* (Turnhout: Brepols, 2005), 135-156.
- (12) Nancy G. Siraisi, *History, Medicine, and the Traditions of Renaissance Learning* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2007), 141-167.
- (13) Hiro Hirai, *Medical Humanism and Natural Philosophy: Renaissance Debates on Matter, Life and the Soul* (Leiden: Brill, 2011), 104-122.
- (14) Hiro Hirai, "Il calore cosmico in Telesio fra il *De generatione animalium* di Aristotele e il *De carnibus* di Ippocrate," in *Bernardino Telesio tra filosofia naturale e scienza moderna*, ed. Giuliana Mocchi et al. (Roma: Serra, 2012), 71-83.
- (15) カルダーノ『わが人生の書』第四四章、一九九頁。

られねばならないだろう。そこで本解説をしめくくるにあたり、第三部をより深めるための補助線を引いておくことにしたい。⁽¹⁸⁾ここでその役割をになうのが、本書で二度だけ登場しているユリウス・カエサル・スカリゲルである。一五五七年にパリで出版された『顯教的演習』*Exotericæ exercitationes*のなかでスカリゲルは、九〇〇頁以上にわたってカルダーノの『精妙さについて』を批判した。その批判の焦点となっているのが、まさに『一について』にあらわれている世界観である。この批判から浮かびあがるカルダーノとスカリゲルの対立軸を起点に『精妙さについて』を読み解けないだろうか？ それによりカルダーノの世界観を歴史的に位置づける手がかりをえられないだろうか？

単一の原理である靈魂が秩序を生み出すという考えをスカリゲルはいくつかの側面から批判する。それはまず聖書の記述に反する。『創世記』第一章二四節には「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ」(新共同訳)と神が世界のはじめに命じたと書かれている。これは動物が種ごとに創造されたことを意味する。よってそれらの動物を単一の原理の発現とみなすことはできない。だがスカリゲルがなによりも問題視したのは、カルダーノのように考えては観察される経験的な事実を説明できないという点であった。世界ではいろいろな事物がそれぞれの本性にしたがって多様に活動している。この多様性を神以外の唯一の原理に還元することができないのは明らかだというのだ。

スカリゲルの批判はカルダーノだけに向けられていたのではなかった。カルダーノの背後にさらに大きな思潮が看取されていた。まずスカリゲルはカルダーノの哲学はプラトン主義の亜種であると断じた。この理解は本書第七章でも示されている。靈魂によって秩序づけられた世界という觀念が、プラトンの『ティマイ

オス』にさかのぼるものとして解釈されるからである。スカリゲルにしてみれば、カルダーノは復興したプラトン主義を味方につけてアリストテレス主義をゆるがせうとする思想家だった。

プラトン主義はもう一つの思想潮流、しかもアリストテレス主義側のそれと同盟を結んでいるとスカリゲルはとらえていた。アヴェロエス主義である。アヴェロエスはすべての人間が一つの知性を共有すると主張

- (9) José Manuel Garcia Valverde, "The Arguments against the Immortality of the Soul in *De immortalitate animorum* of Girolamo Cardano," *Bruniana & Campanelliana* 13 (2007), 57-77; idem, "Averroistic Themes in Girolamo Cardano's *De Immortalitate Animorum*," in *Renaissance Averroism and Its Aftermath: Arabic Philosophy in Early Modern Europe*, ed. Ann Akasoy & Guido Giglioli (Dordrecht: Springer, 2013), 145-171. 註釋を扱った近年の研究として、Guido Canziani, "L'anima, la mens, la palingenesi: appunti sul terzo libro del *Theonoston*," in *Cardano e la tradizione*, 209-248; Ian Maclean, "Cardano on the Immortality of the Soul," in *Cardano e la tradizione*, 191-208; Guido Giglioli, "The Eternal Return of the Same Intellects: A New Edition of Girolamo Cardano's *De immortalitate animorum*," *Bruniana & Campanelliana* 13 (2007), 177-183; Maclean, "Cardano's Eclectic Psychology and Its Critique by Julius Caesar Scaliger," *Vivarium* 46 (2008), 392-417; Giglioli, "Mens in Girolamo Cardano," in *Per una storia del concetto di mente*, ed. Eugenio Canone, 2 vols. (Firenze: Olschki, 2005-2007), II, 83-122; Guido Canziani, "La resurrezione secondo la ragione naturale: Gerolamo Cardano e la palingenesi," *Nuova rivista storica* 94 (2010), 15-52; idem, "L'immortalité de l'âme chez Cardan, entre histoire naturelle et vision de Dieu," in *La pensée scientifique de Cardan*, 161-184.
- (17) Girolamo Cardano, *De immortalitate animorum*, ed. José Manuel Garcia Valverde (Milano: FrancoAngeli, 2006), 334.

していた。この学説は人間靈魂の個別性を否定するため、死後に各個人に裁きがくだされるといふ神学教義の否定につながる。そのため知性単一説はカトリック教会から反発をまねいていた。しかし神学部を当初そなえていなかったイタリアの大学では、学芸学部を中心にアヴェロエス学説が真正なアリストテレスの解釈として支持をあつめるにいたる。これにスカリゲルは反発していたのである。彼にいわせれば、アヴェロエスはプラトンと同じ過ちをおかしている。世界靈魂論にせよイデア論にせよ知性単一論にせよ、個々の種別性をこえつつも神とは別個の普遍的な原理に個物が従属すると考えるからである。世界はそのようには説明できない。

もつとも強くスカリゲルが反発したのが、カルダーノによる靈魂の物質主義的な解釈であった。じつはカルダーノは靈魂を熱と同一視する。熱としての靈魂が世界に浸透することで多様性のなかに秩序が生まれるというのだ。この熱が天に由来するから、秩序の起源は天上に求められ、それゆえ人間の運命も星辰の支配下におかれることになる。カルダーノ本人はこの熱が非物質的な原理であることを強調していたものの、スカリゲルにしてみれば元素的な四性質のひとつである熱は物質的なものでしかなかった。靈魂を物質として理解し、その不死性を剥奪することはポンポナツィによるアリストテレス解釈と重なる。スカリゲルは靈魂を物質に還元する論者のことを「靈魂の死刑執行人」と呼び激しく非難していた。

以上からわかる通り、スカリゲル自身もまた榎本さんと同じく、カルダーノ哲学の特徴を「時代精神の一般的な傾向」のあらわれとみなしていた。プラトン主義が復興し、アヴェロエスの学説が支持を集め、ポンポナツィの論考が議論の的となる時代状況のなかで、カルダーノの哲学はこれらの思潮すべての集大成と

うつつたのだ。よってスカリゲルはカルダーノとは鋭く対立する世界観を提示していく。すべてのものはその種類ごとに異なる本性を持つている。これらの本性は世界のはじめに神によって非物質的な原理として創造された。こう考えることで『創世記』の記述の正しさは確認され、靈魂の不滅性も保証される。そうであれば世界にみられる多様な活動の存在を説明できない。

スカリゲルは事物のいろいろな本性の総体を「自然」*natura*と呼んだ。アリストテレスに忠実なこのよ
うな立論をカルダーノがどう評価していたかは、『わが人生の書』にある文言が雄弁に語る。「自然とは、そ
れ自体では何者でもない、空虚な想像上の産物であり、アリストテレスによって導入された数多くの誤謬の
はじまりである」¹⁹⁾。多元性から成り立つ自然を追放し、靈魂により世界の秩序を一元論に把握せねばならな
い。そのうえに「自然の事物の観察を実用的な目的のために利用」という自分の功績は確立されたとカ
ルダーノは考えていた。

こうしてスカリゲルの視点から『精妙さについて』をみることで、榎本さんが本書第Ⅲ部で与えた見通し
に具体性をあたえ、そこから以後の探究課題を示すことができるだろう。スカリゲルのカルダーノ理解には
当然バイアスがかかっている。ではたしてカルダーノはプラトン主義、アヴェロエス主義、ポンポナツ
ィの諸文献のうち何を手にとり、それらをどう解釈していたのだろうか？ またカルダーノとスカリゲルの

(18) 以下は、H・ヒライ編『ミクロコスモス…初期近代精神史研究 第二集』に収録予定の拙稿「ルネサンスの世界靈
魂論争…カルダーノとスカリゲル」に依拠する。

(19) カルダーノ『わが人生の書』第四四章、一九九頁。

あいだにある世界の一元論的な理解と多元論的な理解という対立の軸は、つづく一七世紀にはどう変奏されるのだろうか？ これらの問いに答えていくなかで、カルダーノをより精密に同時代の知的状況のうちに位置づけながら、同時に知の歴史におけるその意義をより長い射程のなかで探ることができよう。

もちろんスカリゲルを通じてカルダーノのすべてが汲みつくされるわけではない。守護霊や夢解釈といった主題はスカリゲルからはこぼれ落ちてしまう。自叙伝の研究における榎本さんの到達点から先に進むためには、また別の角度からカルダーノに光があてられなければならない。そのような研究もあらわれはじめてはいるものの、今後いかなるカルダーノ像が浮かびあがるかはまだ明らかではない。カルダーノを知ろうとする者は本書に立ち戻りながら、新たな探究の道を探し求めることになる。

A・グラフトンは今後のカルダーノ研究について次のように述べている。「これからあと何年も、彼の著作を研究する学徒は、途方もなく広大な花園のほんの小さな部分を探索する青虫の役割に甘んじなくてはならないだろう。解決するものより謎の方が数多いし、暗い領域がそれぞれの明るい領域を取り囲んでいる」⁽²⁰⁾。榎本さんの著作は広大な「暗い領域」を探索するためのまたとない灯火となるはずである。

(20) グラフトン『カルダーノのコスモス』二七頁。